



「ファジー」
ビデオアート VACM-1313

先月号で本誌初登場を飾った話題のイスラエル人ギタリスト＝オズ・ノイが、早くも2ndスタジオ・アルバム「ファジー」をリリースする。前作のコンセプトが、ツイン・ドラム、ツイン・ベースだったのに対し、本作はリズム体を3つに分け、あくまでも3ピースによる生楽隊のグルーブをバックージュすることに重きを置いている。ギター面では、ジャズを源流としながらも、ループを始めとしたさまざまなエフェクターを駆使し、ひとつのジャンルに凝り固まらぬ摩訶不思議なサウンドを作り出している。ギターが秘める無限の可能性を体現するオズ・ノイが語ってくれた。

OZ NOY

オズ・ノイ

INTERVIEW

撮影：黒原祐
翻訳：寺屋智博

レコーディングされた部分が
すべてマジカルな時間だと考えたいね。

ジェフ・ベックと同じサウンドで、同じようにプレイすることなんて不可能なんだよ。

●前作「ハット」に比べて、本作「ファジー」ではエフェクトを多用している印象を受けましたが、いかがでしょうか？

○エフェクトの数はほぼ変わっていない。ただ、「ファジー」では明らかにループを多用するようになったね。

●確かに、クレジットにもギター&ギター、ループというように記述されていました。ループを多用しようと思ったのはなぜ？

○曲に対して新しい質感を加えたかったというのが大きい。何か欠けていると感じる部分では、ループによって効果的に空間が埋めることができた。「フィッチ・ウェイ・イン・アップ？」のような曲では特にループが重要なパートになっているし、「スリー・ウェイ・シーズ」はまさに核となっている。それから、「エビストロ・ファンク」では、リフを2倍速にして逆回転を加え、それをループさせているよ。本作に関しては、ループによって曲が作られていると言っても過言ではないものがほとんどだ。

●何気ないループからインスパイアされて曲ができることもあるのですか？

○いや、ループからできた曲はないな。曲自体は最初から頭の中にある*ここにループを入れてみたどんな感じになるのだろうか？という発想を試してみるのさ。トライした結果が、そのまま曲として完成するという感じかな。「サムタイムス・イット・スプーズ・イン・エイプリル」や「イン・シンブル・ウェイ」みたいなバラードの曲では、テクスチャーとして導入している。

●先日のライブでは、演奏前にその場でループを作った曲を聴いていましたけど、ライブごとにループとさせるシンパシーは違うのですか？

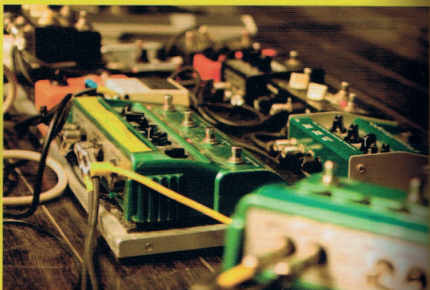
○そうですね。その時々で微妙に異なっている。まったく同じようなループにしたいと思う曲はあるけど、やはりその場で作るかなかなか同じループを生み出すことは難しいんだよ。

●では、その日のループの出発点でバンドのノリやパフォーマンスが変化することもある？

○もちろんそれはある。ライブはナマモノだからね。だからこそ、あらかじめ作ったループ・サンプルではなく、演奏ごとに新しいものを作るんだよ。結果、絶対にそっちのほうがおもしろいものになるから。

●あなたの音楽の癖にインブロー・セッションがありますよね。ライブ中でのエフェクトの積み重ねなんかもインブローの一環と考えるのですか？

オズ・ノイは2台のLINE6製DL4を中心に絶妙な深遠感を演出する。そのほか、ボスのDD-5デジタル・ディレイ、MXRのフェイズ90、フルートンChorus(コーラス/フランジ)、同Supa-Trem(マルチトレモロ)、同Ultimate Octave(フーズアップ/オクターフ)、プロクスターのMoetel Overdriveなど、個性的なエフェクターを多数使用している。



○さすがにそれは難しい。曲の中でどんなサウンドにしたいかという大枠は頭の中にもいつもあって、そのうえでレズリ、トレモロ、ロング・ディレイといったエフェクトを使い分けている。どちらかと言えばいつも自発的な使い方だと思うけど。

●あなたはある意味ジェフ・ベックに近い考えを持っているのではと感じたのですが、いかがでしょうか？

○間違いない彼のサウンドには影響を受けているし、くり出す音のすべてが素晴らしいと思っている。しかし、どこの誰であってもジェフ・ベックと同じサウンドで、同じようにプレイすることなんて不可能なんだよ。特にエッジとフレージングが一番の武器だと思う。まあ彼のプレイは、ベックよりジャズ寄りだからね。

●ジェフ・ベックはアームとホリヤール・コントロール、特にアームとホリヤールを徹底にコントロールして絶妙なニュアンスを生み出しています。あなたがエフェクターを多用する理由は、彼のそういう細かいコントロールと同じような意識合いを持つのですか？

○そういう考えもあるけど、あくまでも僕の中でエフェクターというのは、サウンドにパリエーションを持たせる手段なんだよ。ベックの中ではそういう細かいコントロールをエフェクトとしてとらえていないと思う。あくまでもひとつのサウンドを奏でているという意識だよ。彼はエフェクターというよりも、せいぜいRATを使うくらいで、基本的にはダイレクトにマーシャルにつなぐというスタイルなはずだから。サウンドやトーンをどうしよう

ではなく、あくまでも「彼のサウンド」を出していることに意味がある。僕も彼のように常に出したいサウンドはあるけれど、その手段がエフェクターを使うということ。そしてベックは、手とアームとホリヤールコントロールでそれを行なうというわけ。

ライブのフィーリングに
すべてをかけている。

●前作と同じ曲でも別のドラマーが叩き出すのはドラコンセプトでしたが、本作は「フィッチ・ウェイ・イン・アップ？」を除き、3組のリズム体に分けてそれぞれ異なる音色を演奏しています。

○前作の流れで、1曲目の「フィッチ・ウェイ・イン・アップ？」だけはツイン・ドラムを採用し、それを生楽隊のリズムを採用している。でも本作は、ギター・ベース・ドラムのトリオで表現することに焦点を置いた楽曲が多いから、いくつかの組み合わせに分けて演奏することにしたんだ。ドラムに関しては、曲を作ったときからドラムがマッチするかというのを頭に浮かべて、一度ドラマーに聞いてもらおうと、ベースの「スリー・ウェイ・シーズ」より明確になってくるんだ。それにドラマーの中ではベースストとの相性もあるから、ドラマーが実際によく叩けるベースストという基準で選ぶことも多い。

●前曲の制作過程は？

○ギターを弾きながらリフやグルーブを探るところから始まる。それが見えてきたら、そのまわりを音で固

していったらよいかを考えていく。まあ、大体そういうやり方だね。

●年々サウンドはどの時点で決めるのですか？

○曲を書き終わる頃には、自分ごどのようなサウンドにしたいかというのとはわかっていて、機材選びのプランまでできあがっている。まあ、作曲している段階で大体の音色がいつも聴こえているのよ。例えば「イエー・イエー・イエー」を書いた時は、作っている時点でフロント・ピッキングアップを使おうと考えていたり、「ファジー」ではブリッジ側のピッキングアップにしようと考えていた。サウンドは作曲の一部でもある僕は感じているよ。

●それはエフェクターを含めたサウンドですか？

○そうだね。基本的なサウンドはエフェクターありきで考える。時には作っている最中に急に思い浮かんだりして新たなエフェクトを加えることもあるし、次第に発展していくこともあるな。多くの場合はレコーディングした時点で大まかなイメージがあるけど、ライブで演奏した途端にすべてのトーンが変わってしまうこともあるよ。

●レコーディングはライブ録音で行なわれるのですか？

○そう、すべてライブ録音。エフェクターも含めてね。ループについてはどうしても別のトラックに独立して、個別にコントロールできるようにする必要があるけど、でもループの作り方はライブと同じで、その場で作り上げているよ。

●今回のアルバムで使用したのはいつものストラトキギターですか？

○そうだよ。ピックアップがすべてディマジオのものに交換されている。フロントとセンターがエアア58というレギュラー製品で、リアはカスタムメイドのものを搭載しているよ。

●使用しているピックは？

○ジム・ダンロップの最も厚い2ミリのやつだね。観音と同じようなタッチが得られるから、全体的にファットなサウンドを出すことができるのよ。

●レコーディングで使ったアンプは？

○フェンダー・リンドマスターのヘッドを2台使用した。65年製と66年製だね。それから、バックキャット2X12のスピーカー・キャビネットを2台用意した。レコーディングでもライブでもアンプはラウドに鳴らしている。そじゃないと僕のサウンドは得られないからね。

●前回のインタビューで

は、演奏の醍醐味は

インプロヴィゼーションによって生まれる魔法のような時間だと話っていましたが、本作ではそのような瞬間はありましたか？

○僕の曲の作り方はけっこうスタンダードな手法で行なっている。イントロがあって、セクションAとセクションBがあって、時にはCセクションがあるといった具合にね。そういう枠組みができあがったあとにインプロヴィゼーションを試みる。だからイントロでいきなりインプロヴィゼーションし始めることもある。ライブ・レコーディングにこだわっているのはそういう時に起こる相互作用を求めているからであって、それ以外の理由なんてないよ。レコーディングされた部分がすべてマジカルな時間だと考えたいね。

●11月には日本でのライブも予定されています。それに向けての意気込みは？

○いつもニューヨークで演奏しているバンドでやるから、とてもスリリングな演奏を披露できると思う。レコードで聴けるサウンドをそのまま観られるはずよ。もちろんライブはいつも違ったものになるからそこも楽しめるだろうね。僕は演奏する立場だから観る側はどう思うかとかについてはうまく言えないけど、とにかくカッコいいショーになるはずだから、ぜひ遊びに来てほしいね。

●ちなみにスタジオとライブ・パフォーマンスは別物とらえていますか？

○僕がやっている音楽からすると、スタジオでライブ・パフォーマンスの勢いを詰め込むのは本当に難しいことなんだ。そして、ライブのフィーリングにすべてをかけていると言っても過言ではない。だからこそ、それにトライして、スタジオ作品でもライブ録音にこだわっているんだよ。

